

第41回札幌くらぶサロンの

柔らかく力強い 歌うようなホルン

札幌では珍しく、穏やかな天候で新年を迎えました。今年最初の札幌くらぶサロンはそんな三連休の最終日、1月13日に開かれました。

第一部は、作曲家の八木札響くらぶ顧問から来期の定期演奏会のプレトーク。

来期は馴染みの薄い、20世紀以降の作曲家が多くラインナップされており、クイズや録音を活用した分かり易い解説は大変ありがたい内容でした。解説の最後には500回記念定期の『復活』のフィナーレの録音が再生され、当時の感動が蘇り、4

月の新首席指揮者グランディ就任記念定期への期待が否が応でも昂まります。

第二部は、札幌ホルン奏者の花澤良平さんとピアニスト永沼絵里香さんを迎えてのサロンコンサート。

それを語る前にホルンの上吹き、下吹きについて書きます。普段聴くオーケストラの演奏会に於いて、ホルンセクションでは華麗にソロを決める1番奏者(首席)や3番奏者(副首席)といった上吹きの奏者に注目が集まりますが、オーケストラにおける、ホルンの本質は2本以上の

ホルンによる和音(主に刻み、後打ち、伸ばし)でありますので、上吹きを安定した音色と技術で下支えする下吹きの奏者がオーケストラのホルンセクションの評価を決めると言っても過言ではありません。最近の演奏会では

花澤さんの下吹きが効いていると感ずることが多々ありました。今宵も期待大であります。

花澤さんの演奏は何と云っても音色が素晴らしい。柔らかさと力強さが同居し、表現力にも幅があり、歌うようなホルンでした。1曲目のジャック・フレールはリズムカルなピアノ伴奏にメロディアスなホルンが乗



令和6年度楽譜支援金贈呈式  
上田会長から荒木札響専務理事へ

を下吹きの音域にアレンジした様な後期ロマン派の薫り漂う印象。3曲目はフォークソングよりシエナンド、郷愁を誘うメロディが印象的。花澤さんの美音にブラボー。4曲目はホルン独奏でポルトガルのホルン奏者、リカルド・マルシニョスの練習曲から、メロディアスなものから重音の様な特殊奏法迄、ホルンの魅力を改めて堪能させて頂きました。

この日のプログラムは殆どが初めて聴く曲ばかり。永沼さんのピアノ独奏のラヴェルのみが聴いたことのある曲でした。耳馴染みのある曲に何となくホッとしてしまう弱い自分。永沼さんのピアノはラヴェルらしい繊密さと洒脱さが同居した良い演奏でした。今年もラヴェルをメインにしたソロリサイタルも予定されているとのこと。そちら

も楽しみにまりました。

再びホルンとピアノに戻り、スクリヤーピンはロシアの作曲家ながら映画音楽風に聴こえる部分もあり、彼がラフマニノフと同時代の作曲家であることを再確認。リチャード・ピルはジャズの要素が強く、クラシックではなかなか聴けない、都会的なホルン。ピアノ伴奏も格好良く、上原ひろみの曲の様な印象。アンコールはCM等でも聴いたことのある、フォークソングのフニクリフニクラでコンサートは幕を閉じ、元ホルン吹きとしては大満足の演奏会でした。

この後は、来期の定期と今日の演奏会を着にした交流パーティーへとなだれ込むのでした。

会員／高橋直樹



花澤良平さん



永沼絵里香さん

は坂本龍一がホルンとピアノで作曲したらこんな曲になるのではとの印象を持ちました。2曲目のヘルマン・ニューリングは下吹きのホルン奏者のオーデイションの課題によく挙がる曲とのこと。リヒャルト・シュトラウスのホルンコンチェルト



花澤良平さんを囲んで

# 演奏会を楽しく聴くために

## 八木幸三（札幌くらぶ顧問）

3月～5月 定期演奏会 Hitaruシリーズ 名曲コンサート

Hitaruシリーズ定期演奏会

第20回

3月19日（水）19：00

指揮 川瀬賢太郎

チエロ 宮田大

### ■芥川也志

#### トリプティック

文豪の三男として生まれた芥川也志の名前を聞くと大河ドラマ「赤穂浪士」のテーマ音楽や

「八甲田山」「砂の器」などの映画音楽が頭に浮かぶが、黛敏郎、團伊玖磨らと共に戦後のクラシック音楽界を牽引した作曲家でもある。この曲は「三連画」を意味する「トリプティック（トリプティック）」が題名に用いられ、ニューヨークのカーネギー・ホールにおいてクルト・ヴェス指揮ニューヨーク・フィルにより初演された。オスティナートを用いた、土俗的雰囲気は恩師でもあった伊福部昭の作風に通じるところがある。

### ■シューマン

#### 交響曲第3番「ライン」

の味わいを感じる。彼は楽器を多層にすることで、より管弦楽の音色に奥深さが生まれると考えていたのではないか。彼の詩的なロマンティズムに溢れた美しい旋律やシンコペーションによる弾むような楽想、さらに、主題を有機的に展開させる楽章間の統一性を生み出す精緻な構成は、彼自身のオーケストレーションで、はじめて生彩に描かれる。

第668回定期演奏会

4月19日（土）17：00

20日（日）13：00

指揮 エリアス・グランディ  
ソプラノ マリ・エリクスモーエン

メソソプラノ カトリオーナ・モリソン  
合唱 札幌合唱団ほか

この曲は第1番から6年後に発表されたが、前作同様素朴な抒情性、線の対位法、民謡風な旋律の使用などマラーの特徴を内包してはいるが、さらに野心的で意欲に満ちたものとなっている。その最大の聴きどころは、やはりクロープシュトックの「復活」の讃歌であろう。マラーが強く影響を受けたビュローの葬儀で、「復活」の合唱が響き、



マリ・エリクスモーエン

©Astrid Waller

Hitaruシリーズ定期演奏会 第21回  
4月24日（木）19：00  
指揮 エリアス・グランディ  
ピアノ 清水和音



カトリオーナ・モリソン

©Jeremy Knowles

### ■ブラームス

#### ピアノ協奏曲第1番

若きブラームスは、師であるシューマンがライン河に入水未



川瀬賢太郎

© Y. Fujii

### ■菅野祐悟

#### チエロ協奏曲「十六夜」

1977年生まれの菅野祐悟は東京音楽大学を卒業後、映画、CM、アーティストなどに楽曲を提供している作曲家。音楽プロデューサーや画家としてもその才能を発揮している。関西フィルに交響曲なども提供し、純音楽でも活躍している。このチエロ協奏曲は、彼の交響曲第2番を聴き、感

### ■マラー

#### 交響曲第2番「復活」

2007年6月に定期演奏会500回記念で尾高忠明がこの第2番を演奏したが、4管編成の大オーケストラにソプラノなどの独唱、合唱、さらにホルン、トランペットなどのバンドも加わる全5楽章の大交響曲は、何

待が膨らむ。



エリアス・グランディ

宮田大

©日本コロムビア

遂をした半年後に

「2台ピアノの為のソナタ」を作曲した。

この曲を彼は、シューマンの妻クララと試奏を繰り返しながら初の交響曲に書き直そうと考える。しかし、交響曲の構想



清水 和音 ©Mama Miki

はピアノと管弦楽の為のこの曲へと変わっていった。ブラームスの真の交響曲は、それから20年の歳月が必要だった。それまでの協奏曲のイメージは、独奏楽器が超絶技巧を駆使して、管弦楽と対峙しながら華やかに演奏するものとされていたが、この曲はピアノ独奏と管弦楽が融合し、一体となって音楽が展開されるように作られている。初演当初は不評を買ったが、14年後クララの独奏によるゲヴァントハウスでの演奏は好評を呼んだ。ピアノ界の重鎮、清水和音が札幌との日々発止の競演が楽しみだ。

■藤倉大

Entwine

藤倉の作品は、札幌でも取り上げられており、2023年の「札幌の第九」で「グロリアス・クラウス」が演奏された。現在47歳の彼は、今世界で最もそ

の作品の演奏頻度が高い作曲家の一人。世界の今の情勢を表したオーケストラの小品をできるだけ早く作曲してほしい、とケルンWDR交響楽団から突然依頼されたのがこの曲。

コロナ禍の中で、藤倉は直感でこの作品のテーマは「touch」であるべきだと考え、2020年から急に禁じられた「接触」を管弦楽によって「共有 集合、ひしめき合い」として表現している。「entwine」とは、英語の動詞で、主に二つの物体が互いに絡み合う、巻きつく、あるいはそれらを絡ませるといった意味を持つ。

■ベートーヴェン

交響曲第7番

躍動的な楽想を持つこの曲は、初演から好評で何度も再演されるほど人気が高かった。そのためベートーヴェン作品にはめずらしく初版から総譜とパー

ト譜とが同時に発行されている。ベートーヴェンは、かつて無いほどリズムについて楽譜に細かな指示を書き込み、テヌートとスタッカートの違いを強調させている。第1楽章などは、ひとつのリズム形で押し通すという斬新さだ。この曲は、そう言った面で舞曲性が強く、後にワーグナーが「舞踏の神格化」と言ったことは有名。札幌弦楽部の峻烈なボーイングが、聴けるかも知れない。

第669回定期演奏会  
5月31日(土) 17:00  
6月1日(日) 13:00  
指揮とオーボエ独奏  
ハインツ・ホリガー

■ホリガー

2つのリスト・トランスクリプション

この曲は、ホリガー指揮による自作自演で、6年ほど前に札幌定期で一度演奏された。F.リストの晩年のピアノ小品「灰色の雲」と「凶星」のホリガーによる編曲版だ。第1曲「灰色の雲」は本作の骨格をなすD.G.Cis.D.H.Eの6音からなるモチーフが、バス・フルートによっ

て地の底から呻き声をあげるように鳴らされる。第2曲「凶星」は禍々しい旋律がパート間で受け渡されながら大音量の波が押し寄せ、トゥッティが炸裂する。

■ケルターボーン

オーボエと弦楽のための変奏曲

ルドルフ・ケルターボーンは、1931年生まれのスイスの音楽家、作曲家。バーゼル音楽アカデミーで長らく教職に就いた。作曲家としては61年にシントウツトガルトで芸術賞を受賞。リズム、速度、旋律、和声をすべてセリーで統合した作品を残している。この曲は60年に作曲さ

れ、特殊奏法も交えた超絶技巧の作品となっている。

■ウェーベルン

管弦楽のための6つの小品 (1928年版)

シェーンベルクの弟子としてベルクと共に12音技法の作品を残したウェーベルンは、無調的語法を確立すると同時に、形式的にはソナタ形式や変奏曲形式などの古典形式の復活を求めた作曲家である。彼は20世紀前半の最も革新的な作曲家の一人として、その影響は絶大であるが、その生涯はあまり報われていない。第2次大戦終了直後にウィーンを占領したアメリカ軍MPの輻射で彼はその生涯を閉じた。

■シューベルト

交響曲「ザ・グレイト」

この交響曲は、シューベルトの亡くなる年に書かれたと長年思われていたが、自筆譜表紙の読み間違えであることが検証されたのが、わずか30年ほど前のことである。当時、シューベルトは歌曲の作曲家として名を知られていたが、交響曲や室内楽曲の作曲家としては、ほとんど知られていなかった。そのため「未完成交響曲」も含め、演奏されず埋もれてしまった作品が多い。この曲も作曲家は音として聞いていなかった。シューベルトの死後、彼の墓参りに訪れたシューマンが、遺品から偶然この曲のスコアを発見し、メンデルスゾーンによって初演された。ベートーヴェンの第9交響曲に憧れを抱いて作曲されたというこの曲をシューマンは「至るところに深い意義があり、一音一音が鋭利を極めた表現を持ち、深いロマン性まきまきとされている」と評したように、まさに「グレイト」な交響曲なのだ。



ハインツ・ホリガー ©札幌撮影

この作品は、ホリガー指揮による自作自演で、6年ほど前に札幌定期で一度演奏された。F.リストの晩年のピアノ小品「灰色の雲」と「凶星」のホリガーによる編曲版だ。第1曲「灰色の雲」は本作の骨格をなすD.G.Cis.D.H.Eの6音からなるモチーフが、バス・フルートによっ

(写真協力 札幌交響楽団)

## ♪ 楽員さんに興味津津

41

はらだ ゆうき  
クラリネット奏者 原田侑来さんに聞く

## 魅力は暖かくて柔らかい音色



## プロフィール

2000年岡山県出身。作陽ジュニアウインドアカデミー(現 作陽JWA子ども吹奏楽団)にてクラリネットを始める。岡山学芸館高校を経て、東京音楽大学を卒業。第11回ヤングクラリネットコンクールヤングアーティスト部門第3位。第5回玉島音楽フェスティバルにて、ソリストとして長瀬敏和氏と共演。2023年度東京音楽大学給費奨学生。第57回岡山県新人演奏会、2024年度ヤマハ新人演奏会にそれぞれ出演。これまでにクラリネットを伊藤圭、金井信之、小倉清澄の各氏に師事。6か月の試用期間を経て、2024年10月1日付で札幌交響楽団に入団。

## すく新鮮な出会い

出身は岡山県倉敷市です。物心つく前から家にはクラシック音楽が流れていました。小学校1年生からピアノは習っていたのですが、細々と続けていた程度でした。そんな中、一番音楽を好きになるきっかけになったのは母の存在です。元々、作陽音大(現くらしき作陽大学)にフル

ート専攻で通っていて、音楽が大好きな母親なのですが、いろんな演奏会に連れて行ってもらったことが自分の中でとても大きなことでした。

小学校3年生の時に「作陽ジュニアウインドアカデミー」という子ども吹奏楽団の体験に行きました。そこで初めてクラリネットに出会いました。母とは

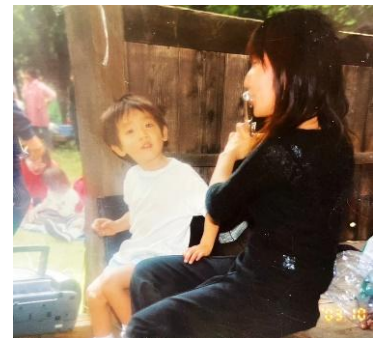
別の楽器をやりたいと思っていたので、クラリネットを持った瞬間はすく新鮮でした。すぐにクラリネットのことが大好きになり、4年生から本格的に始めることにしました。

「作陽ジュニアウインドアカデミー」は小中学生の吹奏楽団で、週に1回、土曜日に練習がありました。この吹奏楽団には、くらしき作陽大学の学生が教えに来てくれていました。毎週、厳しくやる!というのではなく、和気あいあいとみんなで吹くという雰囲気です。とても楽しかったのを覚えています。基本的に音楽を練習する!という感覚はあまりなく、楽しく遊んでいるという方が強かったです。小学校ではクラリネットの他に、合唱のピアノ伴奏もしました。

放課後には友達と毎日集まって木に登って遊んだり、川で遊んだり、そういうことも音楽と同じように楽しかったです。テレビゲームのゼルダの伝説にもはまり、家にダッシュで帰って夢中になってやり過ぎて、父親に「ゲームは1時間まで!」とよく怒られていました(笑)。

## 憧れの吹奏楽部へ

中学校では吹奏楽部に入りました。小学校の頃に近くの高校から聞こえてくる吹奏楽部の練習の音を聴くのが好きで、ずっと吹奏楽部に憧れがあったの



↑ 3歳 キャンプ場で母のフルートを聞いている

↓ 小学校5年生 叔母の結婚式で



で、入った時は嬉しかったです。地区大会で銀賞の弱小の部だったのですが、自分の好きなように練習ができたので、それもよかったです。

印象に残っているのは1年生の時の吹奏楽コンクールです。参加人数の多いA編成で出場するために、入学して間もない1年生も出なくてはなりません。なので僕もコンクールに出ることができました(笑)。

曲はクロード・スミスの「海の男たちの歌」という曲で、クラリネットがとても難しい指使いの曲なので、やばい!って思いながら家に帰ってからも必死にさらっていた記憶があります。放課後、朝、土曜日に練習していたのですが、部活の時間は本当に楽しかったです。絶対音感があるわけでもないのですが、音合わせが合った時は気持ちよくて、大好きな瞬間でした。中学校の時の趣味は、吹奏楽

の強豪校の演奏を聴きあさることでした。自分たちと何が違うんだろう?とか、この演奏はこういうふうにする?とか、そういうのを考えながらいろんな学校の演奏を聞くのが好きでした。思えば、この時から音楽を聴くのが趣味だったのかもしれない。「作陽ジュニア」にも通っていたのですが、部活の方が忙しくなってきたのでやめてしまいました。

## 部活演げの毎日

高校は岡山学芸館高校です。普通科と英語科がありますが、僕は普通科に入りました。吹奏楽が盛んな学校で、全国大会にも多数出場しています。自由な校風で、一人一人の進路に合わせた指導をしてくれる高校でした。僕はどちらかというと授業は上の空、吹奏楽一本という感じでした。もちろん吹奏楽が好

中学校2年生 吹奏楽部  
マーチングの本番



きという気持ちもありました  
が、音楽の道に進みたいなどい  
う気持ちもずっとあったので、  
部活の時間が第一という感じで  
した。ちなみに、小学校の頃はピ  
アニストになって全国を回る  
『旅するピアニスト』に憧れた  
り、中学校の時には吹奏楽団で  
クラリネットのソロになりたい  
と思っていました。

「ム」と「フェスティバル・バリ  
エーションズ」、2年生は「春風  
の通り道」と「モンタージュ」、  
3年生が「ワグネル・ヴァー  
ジュ」と「ワイルド・グース」。  
毎日毎日、夢中で練習していま  
した。とにかく部活漬けの毎日  
で、大変だったのですが、同時に  
仲間とアンサンブルできること  
が嬉しく、今でも大切な思い出  
です。

### 至る所から岡山弁

大学は東京音楽大学です。大  
学在学中は岡山県人の寮に入っ  
ていました。音大に入ると、普通  
はわかる人が音大生ばかり  
になるので、寮にはいろんな  
大学の学生がいたので、他大  
学の学生との交流ができました。  
音大生以外の学生と共同生  
活するのはすごく刺激的で、  
毎日音楽以外の話をするのが楽  
しかったです。

岡山出身の人  
ばかりなので、岡  
山弁が至る所から  
聞こえてきてすご  
く安心感がありま  
した(笑)。  
大学の授業は、  
主に大きく分けて  
「個人レッスンの  
授業」と「アンサン  
ブルの授業」の2

大学4年生

学校の吹奏楽の本番終わり



そのソロは自分の大好きなメロ  
ディーでもあり、本番で吹けた  
ことは本当に素晴らしい経験で  
した。仲間と演奏できたのも自  
分の中で心に残っている幸せな  
思い出です。

### あったかくて

#### フレンドリー

札幌に初めて呼んでいただいた  
のは大学2年生の時でした。  
札幌クラリネット奏者の白子正  
樹さんが僕の先生の伊藤圭先生  
と知り合いであったこともあっ  
て、エキストラとして呼んでい  
ただけでした。現田茂夫さん指  
揮の「ボレロ」でバスクラリネッ  
トを担当したのですが、一人一  
人のソロが本当にみんな素敵で  
とても感動しました。その時に  
強く「札幌に行きたい!」と思  
いました。

オーディションは一次試験が  
23年の1月だったのですが、も  
のすごく雪が積もった時でし  
た。受験の人たちと芸術の森ま  
でタクシーに乗り合わせて行っ  
たのを鮮明に覚えています  
(笑)。本当にすごい雪でした。  
その後、有難いことに札幌に入  
らせていただいたのですが、今は  
本当に毎日楽しいです。

初めて札幌に来た時は、初め  
てのプロオケということもあつ  
たのですがとても緊張していま

奏家になりたいと思っていま  
す。

### ソロもアンサンブルも

クラリネットの魅力は、暖か  
くて柔らかな音色だと思いま  
す。ブラムスとモーツァルト  
の五重奏曲も大好きです。最近  
ではフィンジのクラリネット協  
奏曲がすごくきれいなので気  
に入っています。こういう素晴ら  
しい曲を聴くと、これからはソ  
ロの練習やピアノとのアンサン  
ブルの練習もしたいと思いま  
す。オーケストラの中で吹くの  
ももちろんとても大事だと思  
うので、ソロとオケを並行して  
やっていきたいです。自分の実  
力も測れるので、コンクールに  
も挑戦したいと思っています。

感謝の気持ちでいっぱいです。  
札幌にこんなに愛を持ってくだ  
さっているということが、今後  
の活動の原動力になります。そ  
してこんなに愛されているオー  
ケストラの一員に入れてもらっ  
たという事、心から嬉しく思  
います。札幌くらぶをはじめフ  
ァンの皆様、お客様のご声援に  
応えられるよう、精一杯頑張り  
ます!!

僕らの先生である、伊藤圭先生  
も大好きな演奏家です。僕はど  
うしても技術的なことが気にな  
ってしまったりして、音楽の流  
れがなくなってしまうこともあ  
りました。でも、先生は「音楽」  
というものを一番大切にしてく  
ださい。札幌に入ってから、新  
しい曲を次々とやるので、大  
変だと思ふこともありま  
す。そのような時でも、雑になら  
ず、常に音楽を考えて丁寧に取  
り組み、先生のような立派な演

（12月6日 プレミアホテル  
ラ・プロヴァンスにて収録）

## 次期札幌首席指揮者

## エリ阿斯・グランディ 記者会見

11月26日、次期札幌首席指揮者に就任するエリ阿斯・グランディさんの記者会見が行われた。「札幌くらぶ」からは2名が出席した。会見にはコンサートマスターの田島高宏さんと会田莉凡さんもエリ阿斯さんとともに登壇された。

エリ阿斯さんは、チェロ奏者から転身し、国際的な知名度を獲得した「若きシエフ」である。挨拶で「クオリティの維持に力を尽くしお互いに発展させ、キタラを満席にして皆さんと楽しみ、ともに幸せになりたい」と抱負を述べた。

## シエフの魅力について、田島

さんは「躍動感と繊細な表現力が音楽の喜びとなり、共有できることだ」と熱く語ると、会田さんは「崩壊ギリギリのところまで攻めてきても札幌は食らいついてゆきます！」と意気込みを示した。

質疑応答で札幌くらぶからも幾つか質問をした。

Q・影響を受けた指揮者は？

A・往年の指揮者の解釈が気になっていて、一人挙げるならオットー・クレンペラー。

Q・お母さんが日本人ということ、日本人の血をひいて

いることで感じることは？

A・日本に来ると感じるものが多い。しかし残念なことに日本語が話せないなど失ったものを取り戻したいと思

っている。

Q・チェロの演奏もいつか聴かせてもらえないか？

A・何年もチェロに触れていないのでお聴かせできる状態ではないが、個人的な場で

演奏出来るようにしたい。

また会場から、札幌の基礎を築いたペーター・シユヴァルツ

氏もチェロ出身であったことから、期待する声と質問があつた。「弦楽器出身の指揮者の利点はなにか？ 演奏する側にとって利点はあるか？」との問いにエリ阿斯さんは「指揮者は全ての楽器について知らなければならぬので、弦について少しわかつている程度でしかない」と答えた。演奏者側として田島さんは「弦のパート譜にボウイング(弓遣い)を書いて来て下さる

ので表現の意図が伝わり、異義

## クレンペラーか？ フルトウエングラーか？

## エリアスのマーラー「巨人」

11月30日の定期演奏会を聴いた。

エリ阿斯・グランディの次期首席指揮者就任決定後の初登場

ということ、記者会見が行われ、YouTubeで多くの発信がなされるなど、札幌も若いマエスト

ロを熱心にPRしている。プログラムには写真満載の別紙が挿

入されたが、こんなことはボン

マーやパーメルトではあり得な

かった。爽やかな容貌、可愛らしい笑顔も若きマエストロの大きな魅力である。

私のエリ阿斯体験は2年前の札幌定期。「トリスタン(前奏曲と愛の死)」と「海」を聴いて、

その劇的な音楽作りに魅了され

があつてもお互いに理解を深めることが出来る」と利点について話され、納得がいった。

札幌と「若きシエフ」との旅立ちの会見は期待に溢れ、新時代へと突き進む札幌の進化を予感させた。

札幌くらぶ

事務局長 高木誠一

## クレンペラーか？ フルトウエングラーか？

## エリアスのマーラー「巨人」

た。だから首席就任は大歓迎。次年度のプログラムも、マーラー

やR・シュトラウス中心の選曲で、いやが上にも期待が高まる。

エリアスの記者会見に参加し、質問する機会を得たのは幸

せだった。私の「最も影響を受けた指揮者は？」という質問に対しては「オットー・クレンペラー

」と答えたから驚いた。クレンペラーは内声を彫刻しながら遅

いテンポでじっくりと音楽を作るから、エリシユカに近い演奏

スタイルで、エリ阿斯とは真逆のタイプだったからである。ま

た、同席したコンマス会田さんからは、エリ阿斯はオケをギリ

ギリまで追い込むという話もあり、あのワグナーとドビュッ

シーを思い出して、私は深く納得した。

さて、「巨人」であるが、高校時代によく聴いた思い出深い曲

である。小澤征爾BSO盤やバーンスタインNPO盤を愛聴していた。老年のマーラーも「若

き」のこの曲を聴くと妙に感動する」と言ったと聞か、初老の？

私も聴くたびに10代の頃が思い出され、心がじわつと動く。

演奏は予想通り、繊細かつ大胆、緩急の差が大きいダイナミ

ックなものであった。このスタイルは感情の起伏が激しいマー

ラーの曲に合っている。特に印象的だったのは4楽章。展開部

で甘美な第2主題が再現される場面の深い沈潜。そこから徐々に

力を増して大きな終結へと向

かう。この振幅の大きさこそがエリアスの真骨頂で、強烈な盛り上がりを見せたが、副産物として合奏に多少の乱れがあつたのは残念であった。おそらくエリ阿斯は多少の粗さは承知の上

で、オケを限界まで追い込み、大きなクライマックスを築こうとしたのであろう。その熱量の大きさに私は圧倒された。指揮者の強烈なドライブに応えた札幌の熱演に拍手！

この大胆な音楽作りは、細部を緊密に組み上げていくパーメルトとは対照的なスタイルだ。

テンポを揺らし、激しいうねりを生む演奏から、私はあのフルトウエングラーを連想した。彼の

ベートーヴェンやブラームスを聴いて、私は音楽の奥深さを知ったのだが、マーラーを振るとこんな演奏をしたのではない

だろうか。

エリアスの札幌での本格的な活動は始まったばかりである。次は4月の「復活」！あの合唱

付きの大曲を、どれだけダイナミックに演奏するのだろうと思

うと、今から楽しみでワクワクする。今後も彼から目が離せない。

会員／多田真一



2024年12月1日定期  
(写真協力 札幌交響楽団)

# 私の心の糧 — 札幌退団に当たって —

定年退職にあたり、札幌交響楽団での活動を振り返って、今一番強く思うことは同僚に恵まれたという事です。

実は、私と妻の橋本幸子、ヴァイオリンの三原豊彦君は音楽大学の同期生で、学生時代からいつも集まっては騒いでいた仲間でした。その関係性は今も変わっておらず、三人でいる時は音大のオーケストラの延長の気分

にすぐ戻れるようでした。それから、イタリアからいらしたデイバスクアレ・ヴィンチエンツォ氏には、私が日本の音楽教育から学び得られなかった音楽のエッセンスと言える物

を教えていただきました。音楽上の師匠と思っています。

同じくヴァイオリン奏者の河邊俊和さんの演奏は、いつもお手本にさせていただきました。

ファゴット奏者の坂口聡さんには、仕事に向かう真摯な姿勢とどんな音にも気持ちを含めて歌うという音楽家の魂を学ばせていただきました。

このような素晴らしい仲間に恵まれた事は私の財産と思っています。

また、たくさん偉大な指揮者の方々の共演は得難い体験でした。エリシユカさん、ボンマさん、山田一雄さん、飯守泰次



下宿で合宿練習  
(左は三原さん)



勤続30年の祝賀会  
(右は三原さん)



士別のキャンプ場にて



オオルリボシヤンマ

も、捕虫網は常に車中に置き、北海道の広い野山で網を振り回してトンボを追っている瞬間は、今思い返しても心が踊るようです。唯一の経験しなかったことといえば、あれだけ道内を走り回っても一度もヒグマの姿を見なかった事です。

それでは、皆様の今後のご活躍と御多幸心よりお祈りいたします。長い間ありがとうございました。

元札幌ヴァイオラ奏者  
橋本純一郎

## 浜松まで追いかけた

### ウィーン・フィルの「英雄の生涯」

近代管弦楽作品の最高峰に位置し、僕の大好きな交響詩「英雄の生涯」(R・シュトラウス)をウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の生演奏で聴きたいという願望を何年抱き続けたのだろうか。ただ一度の機会であった、2003年のティールマンとの来日公演ではチケット争奪戦に敗れ、無念の涙をのんだものだった。今回(2024年11月)についても、東京公演には手が届かなかった。最後の望みを託し、悲

を自在に使いこなし、大パノラマを繰り広げるシュトラウスの管弦楽作品のなかでも白眉中の白眉であろう。ライバルのG・マラーの作品群が常に陰性の退廃の影をせおっているのに対し、シュトラウスの音楽は同じデカダンでも頻繁に茶目つ気たつぷりの陽気さが振りまかれてくるのだ。僕はそこが好きだった。交響詩「ドン・ファン」「テイル・オイレンシュピーゲルの愉快な悪戯」「ドン・キホーテ

の延長線にそびえ立つ、オーケストレーションの達人の傑作がヨーロッパの名門ウィーン・フィルによってどのように料理され、鳴り響くのであるうか。いやが上でも期待が高まった。

最初のプログラム(ベートーヴェンのピアノ協奏曲第3番ハ短調)の冒頭で、収穫期のそよ風に揺れる穀物穂に頬を撫でられるような弦楽器の繊細さに早くもウィーン・フィルの「音」を実感した。続いての、官能の妖艶さとナルシジズムの危うさが交錯する、僕のお目当ての交響詩は、指揮者のネルソンス氏に一層の濃厚な味付けを求めたかったものの、ウィーンのローカル色に染まる見事なものであった。コンサートマスターのシュトイデ氏のヴァイオリン・ソロと第1ホルンの大詰めの旋律が僕の胸

の中でいつまでもこだました。同じ列車に乗り合わせたのか、新幹線浜松駅改札出口でオーケストラメンバーに出くわし、歩きながらシュトイデ氏と対話できたのもミラー族の今回の追っかけ旅行断行に華をそえた。

会員/村岡範男



ボの採集が趣味でしたので、楽器を積み忘れそうな事はあつて

「英雄の生涯」は、数多くの楽器

僕の愛聴盤⑫

### 作曲家への敬愛の心が高い次元で結晶

#### 〇クラリネット五重奏曲

イ長調 K581

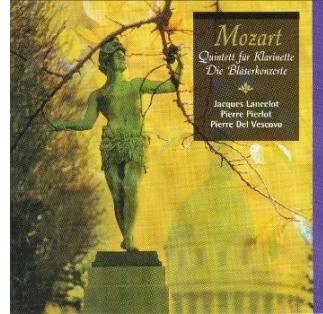
(モーツァルト)

ジャック・ランスコ

(クラリネット)

バルヒエツト四重奏団

(59年録音)



もう60年近くも前のことだろうか。フランスのクラリネット奏者ジャック・ランスコが来日しており、ある新聞社に対するインタビューで彼は「モーツァルトは神のような存在だ」というような趣旨のことを述べていた。交響曲(特に第39番)やピ

アノ協奏曲第22番などのクラリネット・パートに加え、もちろんクラリネット協奏曲K622とこの五重奏曲が彼の念頭にあったのだろう。モーツァルトへの傾倒の想いが熱っぽく伝わってきた。

オーボエ等にくらべ、当時としては比較的新しい楽器であったにもかかわらず、モーツァルトはこの楽器を天才的なひらめきで使いこなし、芸術性の高い極上の音空間を創り上げた。その最高傑作がこの五重奏曲である。特に第3楽章メヌエットではトリオをふたつも挿入するなど作曲家の並々ならぬ意欲を知ることができる。

ブラームスただ一人が近づきえた領域ゆえか、この室内楽の録音は数多い。ウィーン・フィルのメンバーが競って世に送り出したデイスクの数々も、ウィーン情緒たつぷりで僕の耳を大いに刺激するが、ここでは少年時代からなじんだということもあって、ランスコ盤を推したい。肉感的ともいえるクラリネットのなまめかしい響きとヴァイオリン(バルヒエツト)の澄み切った清涼感が、作曲家最晩年の心象風景をいかに描き切っているとともに、聴く者の耳に興奮冷めやらぬ余韻をのこす。

西洋音楽史上最高と言ってもよい、室内楽鑑賞の醍醐味ここにあり。

会員/村岡範男

### 楽譜支援金で購入した楽譜について

#### ◎ラヴェル:

「ダフニスとクロエ」第1組曲

この曲はバレエ音楽ですが、オーケストラだけで演奏できるようにこの中から第1組曲と第2組曲の2つの組曲が作られています。この2つの組曲の中では、第2組曲のほうが演奏機会は比較的多いのですが、それに比べて第1組曲のほうは演奏頻度が少なく楽譜も所有していません。この曲の著作権が日本ではすでに消滅していることからこの機会にリプリント版の楽譜を購入することにしました。

#### ◎マーラー: 交響曲第2番

(合唱指導用スコア)

今回は新しい

Stark-Voit/Kaplan 校訂版で演奏します。オーケストラのパート譜はレンタルなのですが、購入可能なスタディースコアを合唱団の指導用に購入することにしました。

札幌交響楽団

ライブラリアン

中村大志

### 2024年度 札幌くらぶ楽譜支援金 支出内訳

作曲者	曲名・品名	購入代金	備考
1 ラヴェル	ダフニスとクロエ第1組曲	91,195 円	2025/6定期
2 マーラー	交響曲第2番(合唱指導用スコア)	27,935 円	2025/4定期
3	楽譜運搬用トランク	378,675 円	
		合計 497,805 円	

※今年度の楽譜支援金では「楽譜運搬用トランク」も購入するとのことですが、これにつきましては会報109号(次号)にて詳しくお知らせする予定です。

### スタッフの声

▼9月定演のR・シニトラウスのホルン協奏曲。ソロもオケもよかつたが、2楽章冒頭のオーボエソロが秀逸。首席の関さんの豊かな表現力に驚いた。子育て世代でもある関さん、応援しています。また9月のサロンは会田莉凡さんの独奏。リボンナポリンとコラボしていたから「リボンちゃん」のイメージだったが、豊平館で聴くとどの曲も何と豊かで分厚い音楽であろうか。さすが若くしてサイトウキネンに呼ばれる逸材だと改めて納得。これからも札幌の応援続けます。(多田)

▼壮大なオーケストラの演奏会も素晴らしいが、室内楽をより少ない人数で聴くのも好きだ。余遊(爺活の自称)を見つけ或いは創って足を運んでいる。基本は楽員さん優先だけど望外その機会は多いと思う。けれど小さな演奏会の開催は集中してしまふ。確かに札幌の演奏会を除いた日程は限定される。だからこそ贅沢な悩みを抱える。僕だけの途巡だろうか。我こそに恵み賜うかな? これからも憧憬と闊達な夢廊に、彷徨いたいと思う。(爽)



長い間ありがとうございました

ヴァイオラ奏者 橋本純一郎さん

11月退団